
爆裂！ポケモン学園バトル部！！

ガイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爆裂！ポケモン学園バトル部！！

【Nコード】

N5157M

【作者名】

ガイル

【あらすじ】

ポケモン学園に通う少年タイガはひょんなことからポケモンバトル部に入ることに・・・。

プロローグ（前書き）

ガイルです。

これから頑張って書くので気長に見て下さい。

プロローグ

ポケットモンスター。縮めてポケモン。人々はポケモンと協力し平和に暮らしていた。だが、ポケモンを悪用する人間が増え、ポケモンを道具のように使う現状をおもく見たポケモン協会は正しいポケモンとの共存を子供たちに教えるためポケモン学園を各地に作り子供たちに教育を始めた。

これはそのポケモン学園に通っている1人の少年の物語である。

普通に家が並ぶ住宅街、ある一軒の家の中で1人の少年タイガが寝ていた。

「ピカ〜、ピカチュー!」

タイガを1匹のピカチュウが必死起こそうとしていた。

「ピカピ!ピカチュー!」

「く〜、く〜。」

イラッ！

「ピカチュー！！」

ついにキレたピカチュウがタイガに電撃を食らわせた。

バリバリッ、

「〜〜っ、ぎゃ〜！」

電撃によって少年はベッドから転げ落ちた。

「う〜、いてて。ライトもうちょっと優しく起こしてくれよ。」

ライトと呼ばれたピカチュウは、無視して部屋から出ていった。それを見てタイガは軽いため息をつくと服を着替え、鞆を持ち、下へ降りていった。

「う〜、おはよう。ライト。」

「ピカチュー！」

タイガは朝食を食べ、皿を洗い、ライトを肩に乗せ、靴を履き、玄関にある写真を持ち上げて、

「父さん、母さん行ってきます。」

「ピカチュ！」

と言って家をでた。

第一話模擬戦タッグバトル

「おゝすタイガ。」

「ズガ〜。」

「はよゝ、ユウ。」

「ピッカ!」

コイツはユウ。一応幼なじみだ。ついでにいうならクラス替え等で離れたことはない、つまり腐れ縁だ。

「今日は1時限目グラウンドでバトルの講習だったさ。」

「うえゝ、俺あの先生嫌いなんだけど。なあ、ライト。」

「ピカ〜。」

「ハハっ、しょうがねえよ。あの先生お前に思いっきり目つけてるからな。」

実戦バトル専門のカイリという先生は、なぜだか俺に絡んでくる。というかいつもお手本にとかそういう理由でバトルさせられる。正直うっとおしい。

「まあ、教室行こうぜ。」

「ズガズガ。」

言い忘れていたが、コイツはユウの相棒のズガイドスのガイ。ずつき等の技を得意にしている。ライトとの仲も、まあ俺とユウの仲ぐらい付き合いが長い為、よく一緒に遊んでいる。

「そうだな。」

そんなこんなで、1時限目に入った。

「今日はタッグバトルの授業ですが、始めにクラス代表で見本を見せていただきます。タイガ君、ユウ君頼めますか？」

うわゝ、やっぱりきたよ。

「・・・・・・・・はい。」

「わかりました。」

さて、相手は誰かな？

「先生、僕らがバトルしましょうか？」
と出て来たのは・・・・誰だ？

「ほら、ヒロトとセイヤだろ。金持ちの。まったくクラスの奴ぐらい覚えるよ。」

「悪い悪い。」

そんな事をユウと話していると、

「じゃあお願いするわ。両方ともバトルゾーンへ。」

それぞれバトルゾーンに立つと、

「各個人1匹ずつ、どちらか両方のポケモンが倒れたら試合終了よ。では、始め!!」

「頼むぜライト!!」

「行ってくれガイ!!」

「行け!!ロズレイド!!」

「頼みます!!ゴリキー!!」

ちなみにポケモンに名前をつけるかつけないかは自由に特に決まっていはいない。

「さあ、ロズレイドマジカルリーフ!!」

「でんじはで撃ち落とせ!!」

向かってきたマジカルリーフがでんじはによって下に落ちた。

「ゴリキー！ばくれつパンチ！」

「足元にでんじは！」

ゴリキーはばくれつパンチを放つ前に転んだ。

「しねんのずつき！」

ゴリキーにガイがしねんのずつきを当てた。

「ゴリキー！？」

「ちっ！ロズレイド、リーフストーム！」

ガイとライトにリーフストームが向かってきた。

「かえんほうしゃ！」

「十万ボルト！」

リーフストームにかえんほうしゃと十万ボルトがぶつかり。

ドカーン！！

煙りがはれると、

「ロゼー。」

「リキ」。

「ピッカ！」

「ズガ！」

目を回したロズレイドとゴリキーと、元気いっぱい
のライトとガ
イがいた。

「ゴリキー、ロズレイド戦闘不能！よってタイガ・ユウ組の勝ち
！」

第一話模擬戦タッグバトル（後書き）

次回はさっそく新キャラを出します！

第二話出会い

〔放課後〕

ユウは部活に俺は部活には入ってないので帰ろうとしていた。

「んじゃ、また明日。」

「おう、またなユウ。」

「ズガズガ。」

「ピカ〜ピカチュ。」

扉に手をかけて開けようとした時、

ガラッ！

「ユウ君！大変なの、ちょっと来て！！」

と短髪のいかにも運動をやったそうな女の子が飛び込んで来た。

「わかった、じゃあなタイガ。」

「おう。」

ユウと女の子がいなくなり、ガラッとした教室を出て、ライトを肩に乗せ、俺はいつものようにいったん家に帰り荷物を置いて晩飯の買い物に出ていた。

「あゝ、今日どうするライト？」

「ピカ〜カ〜？・・・ピッカチュ！」

「おっ、オムライスか。よし、今日はオムライスだ。」

「ピカー！」

とそんな会話をしながら買い物をする。家に向かっていくと、

「やめて下さい！離して！！」

「いいじゃねえかお嬢ちゃん、ちょっとぐらい付き合ってくれよ。」

「そうそう、ちょっとでいいからさ。」

いかにも不良って感じの2人組が嫌がっている女の子をナンパしていた。

「ちょっとぐらいいいだろだから、イテツ！？なんだ？」

「ピカー！？」

1匹のピカチュウがほっぺから電気をバリバリと出しながら男達を威嚇していた。

「なっ、なんだコイツ！？」

「ライリ！？」

「コイツ！？ いけ、ガラガラ！ ほねこんぼう！」

ドカツ！

ライリと呼ばれたピカチュウが吹っ飛んだ。

「ライリ！！！」

「さあ、来てもらおうか！」

「やめて下さい！」

男達が女の子を無理矢理連れていこうとつかんだ。

「ライト、助けに行くぞ！」

「ピカチュウ！」

俺は荷物を置いて、女の子を助けるため男達の方へ向かった。

「離して！」

「いいからさっさと来い！」

「おい！嫌がつてんだろ離せよ！」

「なんだてめえ。」

「いいから離せって言うてんだよ。」

「この野郎！ガラガラ、このガキにほねこんぼうだ！」

ガラガラが俺の方に向かってくる。

「危ない！」

女の子が叫ぶ。そして

ガキン！

「なっ！？」

「えっ！？」

俺の前でライトがほねこんぼうをアイアンテールで受け止めていた。
「サンキュー、ライト。」

「ピカチュッ！」

「なっ、おい！お前も手伝え！」

「ああ、ドグロック！」

さっきまで後ろにいた奴までポケモンを出してきた。俺は、

「ちょっと下がってくれ。」

「あつ、はい。」

女の子を後ろにかばい腰に付けたボールに手を伸ばした。

「頼むぜ！」シラユキ」！」

俺が出したのは、”シラユキ”《ラプラス》だ。

「ピッカ！ピカチュ！」

「ラス〜！」

久しぶりのダブルバトルで気合いはいつてるな。

「ガラガラ！ほねこんぼう！」

「ドグロツク！どくづき！」

それぞれの攻撃が向かってくる。

「ライト！シラユキの上に乗れ！シラユキはふぶき！」

ふぶきが2匹に当たり、ガラガラが吹っ飛んだ。

「ガラガラ！？」

「ちっ、ドグロック！」

「遅い！ボルテッカー！」

「ピッカー！」

「ドグ。」

2匹は目を回して倒れていた。

「まだやんの？」

俺がそう問い掛けると、

「ひっ、行くぞ！」

「あっ、ああ。」

と逃げていった。

「ふう、お疲れライト、シラユキ。」

「ピカチュ！」

「ラプス。」

俺がボールにシラユキを戻すと、

「あっ、あの。」

「んっ？あつ、君怪我は？」

「だっ、大丈夫です。あつ、ありがとうございました。」

「別にいいから。じゃ、帰り気をつけなよ。」

「はい！」

そして俺はライトを肩に寄せ、先程置いてきた荷物を持ち家に帰った。

第二話出会い（後書き）

タイガの手持ちですが、

・ライト

・シラユキ

・????

となっています。

今のところ3匹しか持っていないせん。

第三話強制入部！？

2人組の男達にからまれていた女の子を助けた翌日、俺はユウに呼ばれて屋上にいた。

「で、何の用だよ。わざわざこんなところに連れてきて。」

「あゝ、用があるのは俺じゃなくて。」

「私達よ！」

見ると屋上の扉の前に2人の女の子が立っていた。しかも1人は、

「あつ、昨日の……。」

「は、はい！昨日はありがとうございました！」

「なんだよ、タイガ。ミホと知り合いだったのかよ。」

「ミホ？」

「そう、コイツのこと。姫川美保^{ヒメカワミホ}、知らなかったのかよ。」

「昨日喋ってる暇無かったし、すぐ帰ったから。」

「んじゃ、改めてこっちは武内奈津美^{タケウチナツミ}。昨日会ったよな。そこでこちがミホ。2人共俺と同じ部活だ。」

「今度は俺だな。俺は飛龍大牙^{ヒリュウタイガ}。よろしくな。んでコイツが相棒の

ライトだ。」

「ピッカチュウ！」

「よろしく」

「よろしくね。」

「ところで、ナツミはタイガに何の用だ？」

「知らなかつのかよ。」

「教えてくれなかつたんだよ。」

「えー、今日タイガ君に来てもらったのは、ズバリ我がポケモンバトル部に入ってもらおう為よー！」

「・・・は？」

「はい？」

「ピカ？」

「だーから、バトル部に入りなさいー！」

「お、おいナツミちょっとうるさい黙っててー！」

「・・・はい。」

ユウはあっという間に撃沈した。

「で、入るの入らないの？」

「あのさバトル部ってポケモン6匹持ってなきゃ駄目なんだよな。」

「ええ。」

「じゃ、俺無理だ。3匹しかポケモン持ってねえから。」

「ピカチュー。」

「は？・・・ええー!!」

「うるさい。」

「ピカピ。」

「えっ？だってミホ、タイガ君強いつて言ってたじゃない！」

「う、うん。昨日助けてもらった時凄かったよ。」

「あのさ、それなら俺が言ってるっての。」

「あの、話がさっぱりわからないんですけど。」

「ああ、うちの部人数足りないしあんま強くないから廃部になりそうなんだよ。」

「うつん、こうなったらとにかくうちの部に入って！手持ちはそれからよ！」

「なっ、でも」

「部活入ってないんだから、お願い入って!!」

「お願いタイガ君。」

「はあ、しょうがねえな。」

「ピカチュ。」

こうして俺はポケモンバトル部に入る事になった。

第三話強制入部！？（後書き）

すみません？

主人公達の名前ですが、名字がちゃんとあります。

ちなみにユウ君の名前は不動勇^{フドウユウ}です。

では、また次回ぜひご覧下さい。

第四話いきなりバトル！？（前書き）

今回はちょっと短めです。

第四話いきなりバトル！？

「ここが私達の部室よ。」

と通されたのは、小さめのバトルフィールドがある体育館だった。

「へえ、ここが。結構広いな。」

「まあね。あつ、部長！部員連れてきましたよ。」

「おお！早いな、ナツミ！」

「紹介するわ。この人が我がポケモンバトル部の部長、ヨザクラソウマ夜桜蒼真先輩よ。」

「どうも、俺は飛龍大牙です。コイツは相棒のライト。」

「ピッカチュウ！」

「おう、よろしくな！」

「本当はもう1人部員がいるんだけど、まだ来てないみたいね。」

「えっ？もう1人いるのか？じゃあなんで俺が入らなきゃならないんだ？5人いれば大会には出られるだろ。」

「ピカピーカ？」

「ミホは部員じゃなくてマネージャーなのよ。」

「はい、あまりバトルは得意じゃないので。」

「へえ、そうなのか。」

「ピカチュウ。」

とその時、

ダダダダダ！ボタン！

「おい、そこのお前なんでミホさんと馴れ馴れしく話してんだ!？」

「……誰？」

「ピカ？」

「さっき言った最後の1人の風雅湊よ。」
フウガミナト

「俺はタイガ。今日からバトル部に入ることになったんだ。よろしくな。」

「ピッパピカチュウ!」

「お前が？本当に強いのか？」

「強いよ、何たってユウが認めるライバルだからね。」

「それにカツコイイです。／／／」

「なっ、このやろっ？てめえ、俺と勝負しろ！」

「「はっ？」」

「ピカッ？」

「勝負は2対2ダブルバトル。先に2体倒れた方の負けだ。どうだ！」

「うっん、暇だしっか。ライトいいか？」

「ピッカ！」

「じゃあ、審判は俺がやろっ。」

「馬鹿だなミナト。」

「アホね。」

「ズガ。」

2人と1匹が呆れたようにその光景を見ていた。

第四話いきなりバトル！？（後書き）

次回タイガの最後の1匹がでます。

第五話ダブルバトル！勝者は！？（前書き）

今回は長いです。

第五話ダブルバトル！勝者は！？

「じゃあ、先輩お願いします。」

「ああ、ではこれよりダブルバトルを始める。2体共倒れたら試合終了。交換は認めない。いいか？」

「はい！」

〈観客席〉

「さて、ユウどっちが勝つと思う？」

「まあ、やってみなきゃわからんが、タイガの方じゃないか？」

「ふーん、私タイガのバトル見るのは初めてだからわからないなあ。ミホは？」

「私ですか？うーん正直タイガ君の実力をちゃんと知っているわけじゃないのでわかりません。」

バトルフィールド

「では、始め！」

「行くぜ！」エレキ”！”シャドー”！”

ミナトが出したのは”エレキ”《エレブー》と”シャドー”《ゲンガー》だ。

「ふむ。（シラユキはちょっと辛いかな．．．なら．．．。）ライトよろしく。」

「ピッカ！」

タイガの1匹目はライトそして、

「頼むぜ！」ジーク”！”

「バンギラー！」

もう1匹は”ジーク”《バンギラス》だ。

「先手必勝！エレキ、バンギラスに十万ボルト！シャドー、ピカチ
ユウにシャドーボール！」

「エレップー！」

「ゲーンガー！」

「ジーク！砂嵐で吹き飛ばせ！」

「バンギラー！」

砂嵐で2体の攻撃は吹き飛ばされる。

「何っ！？」

「岩なだれ！」

「バッギラ！」

ガラガラッ！

「くっ、かわらわりとシャドーパンチで吹っ飛ばせ！」

「エレレレレッ！」

「ゲーンガガガガッ！」

エレキとシャドーは次々と岩を壊していく。

「地震！」

「バンギッ！」

ドドドドドドッ！

「なっ！」

「エレ。」

シャドーは特性浮遊の為効かないが、エレキは倒れてしまう。

「くっ、シャドー！バンギラスに十万ボル「遅い！ボルテッカー！」

「ピカピカピカピカッピッカ！」

ズガンッ！

シャドーは攻撃を出す前に倒れた。

「エレブー！ゲンガー共に戦闘不能！よってこの勝負タイガの勝ち！」

「お疲れ〜！ありがとな2人共！」

「ピッカ」

「バギバギ」

く 観客席く

「ええ」と何がどうなったの？」

「全然わからなかったです。」

「んじゃ、最初から説明するぞ。」

「お願いします。」

「頼むわ、ユウ。」

「まず最初の2体の攻撃を砂嵐で吹き飛ばしたことだけど。」

「そうそう、あれフィールド技でしょどうやったの？」

「あれはバンギラスの特性砂おこしを使ったんだ。」

「はい？」

「バンギラスの砂おこしを一カ所に集めそこに新たに砂嵐を使う事で砂嵐の盾を作ったって訳。」

「じゃあ地震のときピカチュウがダメージを受けなかったのは？」

「電磁浮遊か、みがわりでも使ったんじゃないか。」

「なるほど。」

「でも、いくらボルテッカーが電気タイプ最強の技だからって一撃で倒れるのはおかしくない？」

「それはな、ぎりぎりまでライトに充電させてたんだよ。」

「でも充電してるようには見えませんでしたけど。」

「それは多分みがわりだ。タイガは最初砂嵐で攻撃を防ぎ砂嵐で俺達が見えなくなってる時に、電磁浮遊をさせて、次にみがわりをさせそれから充電させたんだ。俺達にはれないようにな。」

「凄っ！！」

「なににせよ、ミナトの敗因は最初の砂嵐で動揺して指示が遅れた事だと思うぜ。」

「そうですね。」

「それを見抜いたユウも十分凄いよ。」

こうして俺のバトル部初日は幕を閉じた。

第五話ダブルバトル！勝者は！？（後書き）

ここまで見て頂きありがとうございます。
次回も見えて頂けたら嬉しいです。

第六話さっそく大会！？（前書き）

更新遅れてすいません？

今回は特にバトル等はありませんのでご了承ください。

第六話さつそく大会!?

バトル部入部7日目。俺はユウとソウマ先輩のバトルを見ていた。

「あゝあ、暇だゝ。」

「タイガ君、暇そうですね。」

「よお、ミホ。なんか最近暇でさ、ライトなんか俺の膝の上で寝てるし。」

「今日、いい天気ですからね。そういえばタイガ君手持ち大丈夫なんですか?」

「へ?」

「ナツミちゃんが手持ち6匹に増やしといてって言ってましたよ。」

「あゝ、そっぴや言ってたな。大会いつだっけ?」

「来週ですけど。」

「はっ!マジ!?ヤバい、まだ1匹も捕まえてねえ。?」

「い、今から捜せば間に合いますよ!」

「よし、今日からしばらく休むって言うといて!」

「えっ!?!タイガ君!」

俺はそう言って部屋から出て行った。

「行っちゃった……。」「

「あれ？ミホだけか？」「

ユウとソウマがバトルを終えてミホの方に来ていた。

「あの・・・手持ち増やすからしばらく休むってタイガ君が。」「

「ああ、でも大丈夫かな？」「

「何がだ？」「

ソウマが汗を拭きながらきく。

「あいつ他人のポケモンを捕まえるところは見た事あると思うんですけど、捕まえた事は1回もないんで。」「

「はあ？じゃあライト以外の手持ちは？」「

「知り合いに貰ったそうで。」「

「（大丈夫かなあ、タイガ君。）」

大会当日

「全員いるか！」

「タイガ以外はいます。」

ソウマの問いにナツミが元気よく答える。

「あいつ何やってんだ!？」

「1匹も捕まえられなくて逃げたんじゃないんですか。」

ミナトが興味なさそうに言う。その時、

「おおーい！」

とタイガが肩にライトを乗せ、走って来た。

「おせーぞ、タイガ！」

「すみません!？ちょっと手なずけるのに時間がかかって？」

「まあ、いい。じゃあみんな、行くぞ！」

ソウマを先頭にポケバト部は会場に入って行った。

「試合前控室」

それぞれの過ごし方

「タイガとユウの場合」

「なあ、タイガ。」

「ん？なんだよ？」

「お前いったい何を捕まえたんだ？」

「へえ、ユウ気になんのか？」

笑いながらタイガがきいた。

「まあな、お前との付き合い長いから捕まえたと言う事が信じられねえ。」

「そうだろうな。じゃ、ユウには教えるぜ！実は……………」

タイガとユウの場合、お互いのコンディションを確認する。

「ミホとナツミの場合」

「うっ、緊張してきたよ。」

ミホは強張った顔でナツミを見た。

「あんたは出ないでしょ！」

「でもおっ。」

「ほお、そんな強張った顔タイガに見られていいのかなあ？」

ニヤニヤ笑いながらナツミはミホを見た。

「なっ／＼、なんで／＼！」

真っ赤な顔でミホはナツミを睨む。

「冗談だよ！怒らない怒らない。」

ミホとナツミの場合、ナツミがミホをからかう。

ミナトの場合

「（絶対勝ってミホさんに・・・フハハハハハ！）」

ミナトの場合、一人で妄想中

「ソウマの場合」

「ぐっ、ぐっ。」

ソウマの場合、睡眠中。

そしていよいよ大会の幕が切って落とされる。

第六話さっそく大会！？（後書き）

次回は大会の開会式です。

説明その1

この小説を見て頂きありがとうございます。

この『爆裂！ポケモン学園バトル部！』を執筆している途中、いくつか設定を説明せずとばして書いてしまった部分がありました。誠に申し訳ありません。

そこでたまに説明する為の話を挟んで執筆することにしました。

お手数をおかけするようで申し訳ないのですが、見て頂けたら幸いです。

・この世界はゲームの中の地理のまんまですがジムという建物は無く、各地に小中高一貫の学園があります。（ちなみにタイガの学園はトキワシティで大会はセキエイ高原で行っています）

・旅は学園を卒業してなおかつ資格を取った人だけが出ることを許されます。

・ポケモンリーグはちゃんとありますが、参加する為には条件がありどれかをクリアしなければなりません。

1・リーグの開始二ヶ月前に行われる予選に出る。（これは最終的に14人しかリーグに出られません）

2・伝説ポケモンをゲットする

3・四天王またはチャンピオンに公式に行われる大会で勝つ。

の3つです。（ごくまれに例外が起きる場合があります。例：なんらかの形で警察に貢献した等）

今回はこれで終わりたいと思います。

こないたらない私ですがこれからも見て頂けたらさいわいです。

説明その1（後書き）

次からは本編を更新します。

もう少しまって下さい。

まっけていてくれた皆さんすいません？

第七話開会式（前書き）

久しぶりに更新しました。

今回は蒼真視点でお送りします。

第七話開会式

「では、これよりポケモンバトル大会地区予選開会式を始めます。」

長い挨拶が終わりやつと解放された俺こと、ヨザクラソウマ夜桜蒼真は後輩達を引き連れ控室に向かっていた。

「先輩、試合何時からですか？」

今は後輩の武内奈津美だ。タケウチナツミこう見えてなかなか腹黒い戦い得意としていてはつきり言々と俺は戦いたくない。そついや、試合いつだったけ？

「あ、忘れた」

「あの、確か私達の所はEブロックだから2時間後ぐらいです。」

今は姫川美保。ヒメカワミホなんでこの部活に入ったんだ？と聞きたくなるくらい、いい子だ。マネージャーという面倒な仕事をやってくれている。

「先輩、試合時間ぐらい確認して下さいよ」

「すまん武内」

控室に入り、俺は全員を集めた。

「うい、んじゃ今回の大会について話すから全員よく聞けよ」

「「はい！」」

「今回の大会は3年がいりや引退試合だったが、うちにやいないから関係ない。予選はA〜Nブロックに別れてる。ただし去年の優勝校と準優勝校はシードになってるから関係ない。ここまではいいか？」

「はい！」

「大丈夫です」

「んじや続けるぞ。予選は各チームの中から2人を選出して2回戦行っんだがルールが毎年変わるんで直前まで選手には教えない事になってる。」

「うわあ、面倒臭いわね」

「俺もそう思う。そこで相手に情報を与えない為の作戦として、俺、ヒリユウタイガ飛竜大牙、フウガミナト風雅湊は休み。出るのは不動勇、フドウユウ武内奈津美だ。」

「うす」

「了解です！」

「んじや解散」

俺はごろりと長椅子になっところがつっていると、

「あの、ソウマ先輩。」

「ん？なんだ、姫川？」

「なんで、タイガ君やミナト君を予選から外したんですか？」

「ああ、それは最近出番少ないってあいつらが作者をボコボコに・・
・、つとまあそれは置いといて。あいつらはああゆう変則的な戦い
が得意なんだよ。まあ、見てりゃ分かるさ。」

「わかりました。」

そしていよいよ予選が始まる・・・。

第七話開会式（後書き）

はい、というわけで第七話をお送りしました。

《タイガ》「ところでこのソウマ先輩が言いかけた台詞って・・・」

言わないでえー！思い出しちゃうよー！

《ナツミ》「まあ、知らない方がいい事もあるって事よ。」

《タイガ》「・・・？」

《ユウ》「まあまあ、では次回は俺とナツミが活躍するんでよろしくお願いします！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5157m/>

爆裂！ポケモン学園バトル部！！

2010年10月14日13時01分発行